

中国浙江・福建の詩跡考

植木久行

《浙江省》

【杭州市】

○放鶴亭・林和靖墓

西湖の西北にある島、孤山（海拔38メートル）は、北宋の初期、仕官も妻帯もせず、多く植えた梅の花をわが妻とし、飼育する二羽の鶴をわが子と見なして、清高な境涯を送った隱逸詩人、林逋（967-1028、字は君復、諡是和靖先生）が住んだところである。彼の代表作「山園の小梅二首」（山園小梅二首）其1は、夜の梅の花の幻想的な美しさを、

疎影横斜水清浅　疎影横斜して　水清浅
暗香浮动月黄昏　暗香浮动して　月黄昏

と歌い（『林和靖集』巻2）、梅の花の心を捉えた千古の絶唱とされる。「水清浅」とは、清らかで浅い西湖の水面を指すのであろう。孤山の北麓にある放鶴亭は、もと元の陳子安が建てた記念の建築であり、現在のものは1915年に再建されたもの。付近は西湖観梅の勝地となる。

林逋の墓は放鶴亭のそばにある。林逋は生前、廬のそばに墓を造り、七絶「自ら寿堂（生前に造る墓穴）を作り、因りて一絶を書して、以て之を誌す」（自作寿堂、因書一絶、以誌之）詩を作っている（『林和靖集』巻4）。

湖上青山対結廬　湖上の青山　結廬に対す
墳前脩竹亦蕭疎　墳前の脩竹（長い竹）も　亦た蕭疎たり
茂陵他日求遺稿　茂陵　他日　遺稿を求むるも
猶喜曾無封禪書　猶お喜ぶ　曾て封禪の書無きを

病気で罷免された前漢・司馬相如は茂陵邑に住んだが、彼が重態に陥ったとき、武帝は使者を派遣してその著作を求めた。結句は、この故事を踏まえて、皇帝の御用文人とならなかった自負心を表白する。生前の隱棲地に祠堂が建てられた。明・呉鼎芳の詩「和靖祠の前に晩に坐す」（和靖祠前晚坐）には、前掲の詠梅の名句を踏まえて、

梅花無復主　梅花　復た主（主人）無し
曾有暗香浮　曾て暗香の浮かぶ有り

と詠む（『御選明詩』巻64）。現在、林和靖（逋）の墓【写真】は、放鶴亭の西南23メートルの台

地上にあり、清代に重点的に修復された円形の墓塚と青石の墓碑が現存する。

○于謙墓

于謙の墓【写真】は西湖の西南、西湖区の三台山下にあり、明の天順3年（1459）に造営され、1982年、重修された。墓前の于謙祠は、明・弘治3年（1490）の建造。現存のものは、清・同治8年（1869）に再建された基礎の上に、1998年重修されたものである。明の于謙（1398-1457）は、当地一錢塘（杭州）の出身で、著名な政治家。正統14年（1449）、土木の変後、兵部尚書となって景帝を擁立し、蒙古の南侵に抵抗して都城を守った。しかし景泰8年（1457）、英宗が復位すると殺され、翌年、ここに帰葬された。^{おくりな}諡は忠肅。明末・清初の黄周星「西湖竹枝」詩には、都城を防衛した功績を「山川の改まらざるは 豪雄に仗る」（山川不改仗豪雄）とたたえ、同じく西湖の山麓に埋葬された宋の抗金の英雄・岳飛と並べて、

岳少保同于少保 岳少保（飛）は 于少保（謙）に同じ

南高峰対北高峰 南高峰は 北高峰に対す

と歌う（清・梁詩正ら輯『西湖志纂』巻12）。また同時期の屈大均「于忠肅の墓」（于忠肅墓）に、

一代勲猷在 一代の勲猷（功績）在り

千秋涕淚多 千秋 ^{ていれい}涕淚多し

とあり、清・孟良撰「于忠肅の墓」（于忠肅墓）には、

曾従青史弔孤忠 曾て青史（史書）に従いて孤忠を弔いしに

今見荒丘岳墓東 今見る 荒丘（荒れた于謙の墳墓）岳（飛）墓の東

と歌われる。岳墓の【東】は押韻のために置かれ、本来なら【南】とすべきところである。（屈と孟の二詩は、呂小薇・孫小昭選注『西湖詩詞』上海古籍出版社、1982年に拠る）于謙の偉大な功績と哀れな末路が慨嘆されている。清の蔣士銓にも、「忠肅公の祠墓に謁す」（謁于忠肅公祠墓）詩がある（『忠雅堂詩集』巻15）。



林和靖墓



于謙墓

○天竺寺（下天竺寺）

寺は東晋・咸和5年（330）の建立にさかのぼるが、天竺寺の名は隋の開皇15年（595）、僧真観が道安禪師とともに拡張して、靈隱寺から独立して以降のものである。かくして靈隱寺と天竺寺は、山門を同じくし、靈隱天竺門と呼ばれた。中唐の白居易は「韜光禪師に寄す」（寄韜光禪師）詩のなかで、この珍しい情景を、

一山門作兩山門　一山門　兩山門（兩寺の山門）と作り
兩寺元從一寺分　兩寺は　元と一寺より分かる

と歌う。従って「天竺寺」の登場は、唐詩以後である。盛唐の綦毋潜「天竺寺に登る」（登天竺寺）詩には、まず地勢を、

郡有化城最　郡（杭州）に化城（仏寺）の最（第一）有り
西窮疊嶂深　西のかた疊嶂（重なり合う峰）の深きを窮む

と詠んだ後、莊嚴な寺と周囲の景色を、

仏身瞻紺髮　仏身　紺髮を瞻
宝地踐黄金　宝地（仏寺）　黄金を踐む
雲向竹溪尽　雲は竹溪に向かって尽き
月從花洞臨　月は花洞より臨む

と歌う。同時期の陶翰「天竺寺に宿す」（宿天竺寺）詩には、寺院の壯麗・静謐さとその中で澄みわたる心境が、

正殿倚霞壁　正殿　霞壁に倚り
千楼標石叢　千楼　石叢に標つ
夜來猿鳥靜　夜來　猿鳥靜かにして
鐘梵響雲中　鐘梵　雲中に響く
岑翠映湖月　岑の翠は　湖月に映じ
泉声乱溪風　泉の聲は　溪風に乱る
心超諸境外　心は諸境の外に超え
了与懸解同　了に懸解（悟り）と同じ

と詠まれている。

白居易は杭州在任中の600日間に12度も靈隱・天竺の兩寺を訪れ、月桂（月中に生える桂樹）の実を求めたりしている。「旧と説う、杭州の天竺寺は、毎歳、秋中（8月15日）に月桂の子の墮つる有り」（白居易「東城の桂」詩の自注）と。初唐・宋之間「靈隱寺」詩に、

桂子月中落　桂子（モクセイの実）　月中より落ち
天香雲外飄　天香（妙なる天上の香り）　雲外に飄る

と歌われて以来、靈隱寺と隣りあう天竺寺も、「桂子・天香」の詩跡となっていく。晩唐・皮日休の詩「天竺寺の八月十五日の夜の桂子」（天竺寺八月十五日夜桂子）に、

玉顆珊珊下月輪 ぎよく かさんさん 玉顆珊珊として 月輪より下ち おち

殿前拾得露華新 殿前に拾い得て 露華新たなり

と詠まれるのは、この例である。上句は、玉の顆つぶのようなモクセイの実がぱらぱらと月から落ちてくることをいう。

五代から宋代にかけて、上天竺寺・中天竺寺が建立されたため、寺は下天竺寺と呼ばれることになった。清・厲鶚れいがくの詩「下天竺寺の後に三生石を尋ぬ」(下天竺寺後、尋三生石)の終わりには、

裴回欲問林間笛 はいかい 裴回して問わんと欲す 林間の笛

桂子峰頭待月明 桂子峰頭 月明を待つ

と詠まれている(『樊榭山房集』続集卷3)。清代、寺は法鏡寺と改名された。焼失した後、寺は光緒8年(1882)に再建、2006年以降重修されて、現在、西湖唯一の尼僧寺院となる。

○龍井

杭州市西湖の西、ふうこう 鳳篁(鳳凰)嶺上にある泉(岩溶泉)。りゅうこう 龍泓・りゅうしゅう 龍湫・龍泉ともいい、三国・呉の時代以来のものとする。付近は茶の産地として有名。南宋の周紫芝に「龍井の泉を酌み、聴師の房に書す」二首があり、明の孫一元「龍井を飲む」(飲龍井)詩には、こう詠む。

生平於物原無取 生平 物に於いて 原と取る無きも

消受山中水一杯 山中の水一杯を消受せん(もらい受けよう)

と(明・曹学佺撰『石倉歴代詩選』卷498)。清・乾隆帝にも、「龍井の上りに坐して茶を烹、偶にまた成る」詩がある。

【紹興市】

○王羲之故居・題扇橋

紹興市城区東北隅の小山一戒珠山の南麓にあるかいしゆじ 戒珠寺(1924年再建、1984年重修)は、東晋の著名な書家、王羲之の別業(別荘)の跡地とされる。(西街72号)ちなみに高さ約50メートルの戒珠山は、しゅう 戢山(越王勾踐は呉王夫差に敗れると、この山に籠もり、「会稽の恥を雪ぐ」ために苦い肝を嘗め、食事も山で取れる戢[どくだみ]の菜食だけにして、はんれい 范蠡とともに呉を滅ぼす計画を練ったところと伝える)・王家山(王羲之が会稽内史をやめたとき、ここに家を建てたための命名。南朝・宋の泰始6年[470]に成る虞穌「論書表」に、「旧説に、羲之は会稽(内史)を罷め、戢山の下に住す」とある)ともいう。戒珠寺の前にはようが 養鵞池・せんけんち 洗硯池(鵞池・墨池)があったはずであるが、現存しない。大切にしていた明珠がなくなったとき、親しくしていた老僧が盗んだのではないかと疑い、疎遠となる。僧の死後、白鷺が誤って飲み込んでいたことがわかって、後悔したが及ばず、住居を喜捨して、「戒珠講寺」の匾額を書いたという。南宋・施宿ら撰『嘉泰会稽志』卷13、王右軍宅の条には、「王羲之の宅は、山陰隍の東北六里に在り。旧と戒珠寺と伝う、是れなり。『旧経』に云う、『羲之の別業に養鵞池・洗硯池・題扇橋有りて存す』と。今 寺に右軍の祠堂

有り。既に之を別業と謂えば、則ち宅は是にあらざるかと疑う」とある。戒珠寺の初めの名は昌安寺。唐の大中6年（852）、戒珠寺に改称された（『宝慶会稽続志』巻3）。

王羲之の故宅に関する詩は、中唐・劉言史の「右軍の墨池」（右軍墨池）詩に始まる。

永嘉人事尽帰空　　永嘉の人事　　尽く空に帰し
逸少遺居蔓草中　　逸少（王羲之の字）の遺居　　蔓草の中
至今池水涵余墨　　今に至るも　　池の水は　　余墨を涵し
猶共諸泉色不同　　猶お諸泉（他の泉）と　　色同じからず

宋代になると、詩作が増える。北宋の趙抃には「戒珠寺に遊び、右軍の故宅を悼む」詩、周紫芝には「晩に戒珠寺に遊ぶ。寺は王逸少（王羲之の字）の旧宅なり。寺僧　燭を乗り、王右軍の画像を観、出でて鶯・墨の二池を訪ぬ。帰れば已に三更なり」という詩がある。鄒志方・車越喬編『歴代詩人詠王羲之』（新華出版社、2002年）が参考になろう。

戒珠寺の前（南の方角）に題扇橋【写真】がある。王羲之は、ここで扇の売れない老婆のために字を題いてやり、たちまち売れた。翌日、老婆が扇をたくさん持ってきたが、笑って取り合わなかったという（虞穌「論書表」）。橋の名は、この故事にちなむ。現存の単孔石拱橋は清・道光8年（1828）の建造、長さは約20メートル。南宋・王十朋の七絶「題扇橋」詩が伝わる（『梅溪集』後集巻4）。

右軍一画千金重　　右軍の一画　　千金重し
妙意寧容市嫗知　　妙意（書写の字の妙所）　　寧くんぞ市嫗の知るを容れん
明日重来堪一笑　　明日　　重ねて来るは　　一笑するに堪えたり
管城那肯更臨池　　管城（筆の異名）　　那ぞ更に池に臨む（再び書く）を肯んぜん

○沈園

紹興市区魯迅中路318号にある沈園（沈氏の庭園）【写真】は、旧社会の愛の悲劇を物語る詩跡である。南宋の陸游は20歳のころ、母方の従姉妹にあたる唐琬と結婚したが、嫁と姑の仲が悪く、やむなく離縁した。紹興25年（1155）、31歳のとき、陸游はここで思いがけず唐琬と再会する。（それぞれすでに再婚）唐琬は今の夫に事情を話して、陸游のもとに酒肴を届けさせた。陸游は万感の思いを詞「釵頭鳳」のなかに詠みこみ、沈園の壁に書きつけた。その一節にいう、

東風悪　　歡情薄　　東風悪しく　　歡情薄し
一懷愁緒　　幾年離索　　一懷の愁緒　　幾年の離索ぞ
錯　　錯　　錯　　錯てり　　錯てり　　錯てり

と（『渭南文集』巻49）。唐琬はこの歌詞を見て、ほどなく悲しみのあまり死んだという。

陸游は、最晩年に至るまで、この前妻をしのぶ詩を作り続けた。慶元5年（1199）、75歳のとき、当地を訪れて、七絶「沈園」詩を作る。

城上斜陽画角哀　　城上の斜陽　　画角（角笛の音）　　哀し

沈園非復旧池台 沈園は 復た旧池台に非ず
 傷心橋下春波緑 傷心す 橋下 春波緑なるに
 曾是驚鴻照影來 曾て是れ 驚鴻の 影を照し來れり

と（『劔南詩稿』巻38）。驚鴻（物音に驚いて飛び立つ大白鳥）とは、40年前に再会したときの唐琬の容姿の比喩である。数年後、81歳の陸游は、さらに「十二月二日の夜、夢に沈氏の園亭に遊ぶ」詩を作っている。

清の蔣士銓は、「沈氏園に放翁（陸游の号）を弔う」（沈氏園弔放翁）詩のなかで、老年になって
 も若き日のちぎりを夢見る、その持続的な情愛を、

四十年中心骨痛 四十年中 心骨痛み
 白頭苦作鴛鴦夢 白頭 苦ろに作す 鴛鴦の夢

と歌う（『忠雅堂詩集』巻16、乾隆32年〔1767〕の作）。

ちなみに沈園は1994年、再び広々とした園跡を回復したが、瓢箪状の葫蘆池だけは宋代の面影を伝えるという。近くの春波橋（沈園の西北）は、もと羅漢橋とよばれたが、後人が陸游「沈園」の前掲の詩句（傷心橋下春波緑）に基づいて改名したとされる。



題扇橋



沈園

○陸游故居

紹興市の西へ5キロ、鑑湖のほとりの行宮山の麓（鑑湖郷行宮西村）にあった。陸游はもと山陰（紹興）西北の魯墟に住んでいたが、乾道2年（1166）、42歳のとき、鑑湖（＝鏡湖）のほとり、行宮西村（鑑湖三山の湖に臨む、小さな村「西村」）に移居した。【前年の乾道元年、紹興西郊の三山に家を新築したとの説もある】三山とは石堰山・行宮山・韓家山に囲まれた地をいう。陸游の「鏡中の故廬を懐う」（懐鏡中故廬）詩には、

臨水依山偶占家 水に臨み山に依りて たまた 偶ま家を占む
 数間茅屋半欹斜 数間の茅屋 半ば欹斜す

と詠まれている（『劔南詩稿』巻19）。

山重水複疑無路 山重水複 路無きかと疑えば、
柳暗花明又一村 柳暗花明 又た一村

の名句で知られる「山西の村（三山の西側の村）に遊ぶ」（遊山西村）詩は、三山の新居に移った翌年（乾道3年）の作（『劔南詩稿』巻1）。ただ現在、陸游の故居の跡には、陸游の像【写真】がいたずらに建つのみ。その荒廃は残念である。

○蘭亭

紹興市西南、約14キロの紹興県蘭亭鎮、蘭渚山らんしよざんの東南麓にある。東晋の王羲之おうぎしが、会稽内史だいいし在任中の永和9年（353）の上巳節（晩春3月3日）、謝安・孫綽そんしやくらの名士・友人や一族の者41人を招いて祓禊みそぎをした後、曲水流觴の宴を開いて、詩を競作した。このとき作られた四言・五言の詩を集めて編纂された書が『蘭亭集』1巻であり、王羲之みずから序文（蘭亭叙、蘭亭集序）を書いている。集中には一種の思想詩、いわゆる玄言詩が多いが、なかには孫綽の「鶯の語は脩き竹に吟き、遊ぶ鱗は瀾濤に戯る」（鶯語吟脩竹、游鱗戯瀾濤）などのような、自然描写の句もある（『嘉泰会稽志』巻20、上巳日会蘭亭曲水詩）。

唐の大暦年間（766～779）の初期、鮑防・嚴維ら多数の人による「蘭亭の故池を経 聯句」（経蘭亭故池聯句、北宋・孔延之撰『会稽掇英総集』巻14。本来、『大暦年浙東聯唱集』〔散佚〕に所収）が伝わる。それにはいう（ただし各聯句の作者名は未詳）、

曲水邀飲処 曲水 飲びを邀うる処
遺芳尚宛然 遺芳 尚お宛然たり
名従右軍出 名は右軍（王羲之）より出で
山在古人前 山（蘭渚山）は古人の前に在り
蕪没成塵迹 蕪没 塵迹を成し
規模得大賢 規模 大賢を得たり
湖心舟已並 湖心 舟已に並び
村歩騎仍連 村歩 騎仍お連なる
賞是文辞会 賞は是れ文辞の会
歆同癸丑年 歆は癸丑の年（永和9年）に同じ
茂林無旧径 茂林 旧径無く
修竹起新煙 修竹 新煙起こる
宛是崇山下 宛も是れ崇山（高い山）の下
仍依古道辺 仍お古道の辺に依る

云々と。南宋の『嘉泰会稽志』巻10にいう、「蘭亭の故池は（会稽）県の西南二十五里に在り。王右軍「修禊の処」と。

蘭亭雅集の地は、現在、紹興市から諸暨市しよきに赴くルート（省道）上にあるが、当地はじつは本来

の場所ではなく、明代中期（嘉靖 27 年 [1548]）、「蘭亭叙」のイメージに合う地に再建されて以降のものである。「蘭亭の絶境 吾が州に（名を）擅ほしいまにす」（蘭亭絶境擅吾州）で始まる南宋・陸游の「蘭亭」詩（『劍南詩稿』巻 23）には、

曲水流觴千古勝 曲水の流觴 千古の勝
小山叢桂一年秋 小山の叢桂 一年の秋
酒酣起舞風前袖 酒酣たけなわにして舞を起こす 風前の袖
興尽回橈月下舟 興尽きて橈かいを回らす 月下の舟

と歌われているが、宋代の蘭亭は、唐代の地を継承し、現在地と少し離れた天章寺（北宋の至道 2 年 [996] の建立。現在なし）のそばにあったらしい（南宋・王象之『輿地紀勝』巻 10）。ただし当地も本来の蘭亭の跡ではない。

蘭亭の場所は、本来のものとは異なるが、明清以降も、六朝貴族の風雅な韻事あそびの地として詠まれ続ける。明末の袁宏道は、明代移転後の蘭亭を訪ね、「蘭亭」詩のなかで、

墨池閑貯水 墨池は閑かに水を貯え
猶得放村鷺 猶そんがお村鷺を放つを得たり

と歌う（『袁宏道箋校』巻 8、解脱集之一、万曆 25 年 [1597] の作）。墨池は王羲之が筆や硯を洗ったという池。また鷺は王羲之が愛したガチョウのこと。後句は、そのゆかりのガチョウが今もなお放し飼いにされていることをいう。また清・乾隆帝の七律「蘭亭即事」の頷聯・頸聯には、

風華自昔称佳地 風華 昔より 佳地と称し
觴詠於今紀盛名 觴詠 今に於いて 盛名しるを紀す
竹重春煙偏淡蕩 竹は春煙に重くして 偏えに淡蕩
花遲禊日尚粲 花はけいじつ禊日（上巳節）に遅れて 尚なお粲ふえい（花が咲く）

云々と詠まれている（『御製詩集』2 集巻 25、乾隆 16 年 [1751] の作。〈粲〉の下に「時に三月八日」の夾注あり）。

今日の蘭亭には、鷺池、鷺池碑亭（亭下の碑の「鷺池」の 2 字は王羲之と子の王献之がそれぞれ



陸游像



蘭亭内の御碑亭

一字ずつ書いた、父子合作の筆と伝える)、流觴曲水(長さ78メートル)、流觴亭、御碑亭(【写真】高さ7メートル弱の碑陽には康熙帝の筆になる蘭亭集序、碑陰には乾隆帝が乾隆16年、蘭亭を訪れたときに作った「蘭亭即事」詩[前引]が刻まれている)、右軍祠などがある。鄒志方・車越喬編『歴代詩人詠蘭亭』(新華出版社、2002年)、王春燦編著『古往今來話蘭亭』(上海百家出版社、2010年)が参考になろう。

【諸暨市】

○西施石(浣紗石)・西施殿

諸暨市城区の南部、苧蘿山のほとりを流れる浦陽江(=浣江・浣紗溪・浣浦)の川岸に、西施石(浣紗石)がある。「天下之美人」(『淮南子』修務訓)と評された越の美女、西施が紗を洗ったところと伝える、1メートルほどの大きな石である。傍らの岩には、浣紗の2字が刻まれており、王羲之が西施の古跡を尋ねたときに書いたものと伝える。今回(2010年9月8日)の調査では、川の増水のため充分観察できなかった。近くには浣紗大橋・西施大街などがある。苧蘿山(龍山[陶朱山])の東に延びた支脈にあたる小丘、0.5キロ四方。別名は蘿山の麓が、西施の故里である。西施は苧蘿(諸暨)の出身で、その名は夷光。苧蘿山の山麓には二つの施村があった。夷光は西の施村に住んでいたため、西施と名づけられたという。現存する苧蘿二村は、その伝承を持つか。李白の詩「西施」にもこういう。

西施越溪女 西施は 越溪の女

出自苧蘿山 苧蘿山より出づ

詩中に詠まれた西施石・浣紗石は、六朝末・庾信の詩「趙王の 妓を見るに和す」の、「長く思う 浣紗石」の句を初出とするようであるが、唐代になるとよく詠まれるようになる。盛唐の嵇穎「西施石」詩にいう、

西施昔日浣紗津 西施 昔日 浣紗の津(岸边)

石上青苔思殺人 石上の青苔 人を思殺す

一去姑蘇不復返 一たび姑蘇(蘇州)に去りて 復た返らず

岸傍桃李為誰春 岸傍の桃李 誰が為にか春なる

(『唐詩選』所収)と。李白の「祝八の 江東に之くを送り、浣紗石を賦し得たり」(送祝八之江東、賦得浣紗石)詩にも、

未入吳王宮殿時 未だ吳王宮殿に入らざる時

浣紗古石今猶在 紗を洗いし古石 今猶お在り

とあり、晩唐の崔道融「西施灘」詩も伝わる。

ちなみに南宋・施宿ら撰『嘉泰會稽志』卷11には、諸暨県と会稽県の両条に、西施石について言及する。諸暨県の条には、「浣紗石は苧蘿山下に在り。一に西施石と名づく。『寰宇記』に『山下に石の迹有り。本と西施 紗を洗うの処。今浣紗石猶お在り』と」とあり、会稽県の条には、「西

施石は若耶溪（紹興市の東南の会稽山系から発し、北流して鏡湖〔鑑湖〕にそそぐ溪流。今の平水江）に在り。一に西子浣紗石と名づく。唐の王軒の詩に云う、『嶺上 千峰の碧、江辺 細草の春。今 浣紗石に逢うも、浣紗の人を見ず』（嶺上千峰碧、江辺細草春。今逢浣紗石、不見浣紗人）」という。ただし王軒の詩は、唐・范攄『雲溪友議』卷上、苧蘿過の条に、「舟を苧蘿山の際に泊し、西施石に題して曰く」として見えるものである。従ってそれは諸暨の浣紗石を詠んでおり、その説明は妥当ではない。こうした説を受けて、『大明一統志』卷45にも、浣紗石について、「若耶溪の側らに在り。古えの西施 紗を浣うの所。或いは云う、苧蘿山下に在り、と」という。李白の詩「浣紗石上の女」（浣紗石上女）には、

玉面耶溪女 玉面 耶溪（若耶溪）の女
青蛾紅粉粧 青蛾（青き蛾眉） 紅粉の粧

とあり、これは明らかに諸暨の浣紗石を詠んだものではない。

唐代すでに西施を記念する浣紗廟（西子祠・西施殿）が造られていた。

只今諸暨長江畔 只今 諸暨の 長江（大河）の畔
空有青山号苧蘿 空しく青山の 苧蘿と号する有るのみ

と歌われる晩唐・魚玄機「浣紗廟」詩は、西施を「浣紗の神女」（魚玄機の詩）として祀る諸暨の廟を詠んだものである。晩唐・李商隱「蝶」詩に、

西子尋遺殿 西子（西施）は 遺殿に尋ね
昭君覓故村 昭君（王昭君）は 故村に覓む

とあるのも、同じ建物を指して詠んだものであろうか。明の屠生「西子祠の壁に題す」（題西子祠壁）詩には、

紅粉溪辺石 紅粉 溪辺の石
年年漾落花 年年 落花漾う

と詠まれている（清・朱彝尊編『明詩綜』卷96）。

今日、前述した諸暨市の西施石（浣紗石）のほitori、苧蘿東路2号の地に、1990年、西施殿【写真】が再建された。

【金華市】

○八詠楼

八詠楼【写真】は金華市婺城区の東南隅、東陽江の北岸にある高樓の名。前面が八詠灘である。西流する東陽江（義烏江）と武義江の二水が、八詠楼の西南前方で合流して婺江（別称は金華江・双溪）となる。元・趙孟頫の七律「東陽の八詠楼」（東陽八詠楼）詩には、風景の美しさを、

山城秋色浄朝暉 山城の秋色 朝暉（朝の日ざし）に浄らかなり
極目登臨未擬帰 目を極めて 登臨 未だ帰るを擬せず

と詠み、頸聯には、

西流二水玻瓈合　西流の二水　玻瓈合し
南去千峰紫翠圉　南に去る千峰　紫翠圉む

と歌っている（『松雪斎集』巻4）。

八詠楼の原名は玄暢楼。南朝・斉の隆昌元年（＝建武元年、494）、吏部郎から東陽郡太守に転出した沈約が創建し、建武2年（495）、50歳前後、「玄暢楼に登る」詩と「八詠」詩（玄暢楼八詠）（「登台望秋月」、「会圃臨春風」、「歳暮愍衰草」、「霜来悲落桐」、「夕行聞夜鶴」、「晨征聽曉鴻」、「解佩去朝市」、「被褐守山東」）を作り、絶唱として後世に伝誦された。北宋の『太平御覽』巻176に引く『郡国志』にいう、「金華県は山に因りて城を為り、南のかた溪水に臨む。高阜（高い丘）の上に楼有り。名づけて玄暢楼と曰う。宋の沈約、造りて以て此の処に吟詠す」と。

明・馮惟訥撰『古詩紀』巻84、八詠詩の条に引く『金華誌』には、「八詠詩は、南斉の隆昌元年、太守沈約の作る所にして、玄暢楼に題し、時に絶唱と号す。後人　因りて玄暢を更めて八詠楼と為すと云う」とあるが、唐代すでに八詠楼と呼ばれている。初唐の崔融に「東陽の沈隱侯（約）の八詠楼」詩があり、盛唐の崔顥にも「沈隱侯の八詠楼に題す」という詩が伝わる。さらに李白の「王屋山人魏万の　王屋に還るを送る」（送王屋山人魏万還王屋）詩にも、

沈約八詠楼　沈約　八詠の楼
城西孤岩嶢　城西　孤り岩嶢たり

とあり、中唐の嚴維「人の金華に入るを送る」（送人入金華）詩にも、

明月双溪水　明月　双溪の水
清風八詠楼　清風　八詠の楼

という。北宋の至道年間（995～998）、婺州の長官馮伉が玄暢楼を八詠楼に改めたともされる（『方輿勝覽』巻7、婺州、八詠楼の条）が、従いがたい。崔顥の「沈隱侯の八詠楼に題す」（題沈隱侯八詠楼）詩には、

梁日東陽守　梁の日　東陽の守
為楼望越中　楼を為りて　越中を望む
緑窓明月在　緑窓　明月在り
青史古人空　青史　古人空し

云々という。（これは梁代の創建とする説であるが、穏当ではない）

南宋の李清照は、紹興4年（1134）51歳ごろ、金華に避難して、七絶「八詠楼に題す」（題八詠楼）を作り、

千古風流八詠楼　千古の風流　八詠の楼
江山留与後人愁　江山　後人に留与して愁えしむ

云々と歌っている（『重輯李清照集』巻5）。続く元の黄潛「八詠楼」詩の前半には、

懷古荒碑在　古えを懷えば　荒碑在り
登楼晚望賒　楼に登れば　晚望賒かなり

秋陰垂野薄 秋陰 野に垂れて薄く
江勢抱城斜 江勢 城を抱いて斜めなり

という（『石倉歴代詩選』巻268）。

八詠楼も興廃をくり返した。南宋の淳熙14年（1187）に増築されたが、元の皇慶年間（1321～1313）、焼失する。明の万曆年間に再建され、清の嘉慶年間（1796～1820）、重修される。1984年、八詠楼は大規模に修復された。楼は長い石段を登りゆく、高さ8メートルの台基上にあり、本来、二水（東陽江と武義江）を眼下に収めたが、現在は視界を遮られている。



西施殿



八詠楼

【衢州市】

○爛柯山

衢州市の東南13キロの地にあり、もと石室山・石橋山とも呼ばれた。いずれも山中に石室・石橋があるための命名である。爛柯山の名は後述の爛柯の故事が流布した唐代に始まり、それ以後、山の通称となる。道教の方では七十二福地の一（唐宋・杜光庭「洞天福地記」となり、北宋・張君房『雲笈七籤』巻27には、七十二福地第三十に爛柯山の名をあげる。主峰の海拔は約180メートル。東西2キロ、南北1・9キロ。仙霞嶺の余脈である。

衢州は昔、信安郡（県）と呼ばれた。晋代の木こり、王質が石室のなかで童子（仙人）が碁をうつのに見とれて、斧の柄が腐爛るまで時間が過ぎ去るのに気づかなかった故事（南朝・梁の任昉『述異記』…信安郡石室中、晋時樵者王質、逢二童子棋。与質一物、如棗核、食之不飢餓、置斧子坐而觀。童子曰、汝斧柯爛矣。質歸郷閭、無復時人。『重較說郛』に収める晋・虞喜『志林』も同様の内容を持つ）で名高い。柯は斧の柄をいう。【南朝・宋の山水詩人、謝靈運に「石室山」詩があるが、これは永嘉郡（浙江省温州市永嘉県）の楠溪のほとりの山を指し、爛柯山ではなさそうである。顧紹柏『謝靈運集校注』（中州古籍出版社、1987年）参照】

唐代、爛柯山の詩跡化は急速に進んだ。中唐の孟郊「爛柯石」詩には、

仙界一日内 仙界 一日の内

人間千歳窮 人間（人の世）千歳窮く。
 双棋未徧局 双棋（二人で碁を打ち）未だ局を徧くせざるに（一局を終えないうちに）
 万物皆为空 万物 皆な空と為る
 樵客返帰路 樵客（木こり）返帰の路
 斧柯爛従風 斧の柯 爛りて風に従う
 唯余石橋在 唯だ余す 石橋在りて
 猶自凌丹虹 猶自 丹虹凌ぐを（紅い虹が天空高くかかるかのよう）

と歌われる。石橋は石梁とも呼ばれる爛柯山の名勝。主峰の頂にあって、峰の上に高く架かる天然の橋のごとき巨石であり、今日「天生石梁」と呼ばれている。この石橋の下が石室（東西 30、南北 20、高さ 10 メートル）【写真】にあたり、青霞洞とも呼ばれて、王質が仙人に遇って碁を見たところと伝える。中唐・劉迥の「爛柯山」詩 4 首には、

石橋架絶壑 石橋 絶壑（深い谷）に架かり
 蒼翠横鳥道 蒼翠 鳥道（陰しく狭い山道）に横たわる（其 2、「石橋」）
 爛柯有遺跡 爛柯 遺跡有り
 羽客何由訪 羽客（仙人） 何に由りてか訪ねん（其 3、「仙人棋」）

などと詠まれる。（『全唐詩』巻 312 には、『信安志』爛柯山の石刻に見えるとして、劉迥のほか、李幼卿・李深・羊滔・薛戎らの「爛柯山に遊ぶ」詩を 4 首ずつ収める。いずれも最高頂・石橋・仙人棋・石室二禪師を詠む。南宋・陳思撰『宝刻叢編』巻 13、衢州、「唐遊石橋序并詩」の条には、「序は謝良弼撰。詩は劉迥・李幼卿・李深・謝劇・羊滔撰。元和七年（812）十二月十二日」とある）。また中唐・項斯「爛柯山に遊ぶ」（遊爛柯山）詩には、

歩歩出塵霧 歩歩 塵霧を出で
 溪山別是春 溪山 別に是れ春
 壇辺時過鶴 壇辺 時に鶴過ぎ
 棋処寂無人 棋処 寂として人無し

云々と詠まれる。

宋代以降も詩跡として詠まれ続けた。北宋・錢顛の「爛柯山に遊ぶ」（遊爛柯山）詩には、

雲徑直從深崦入 雲徑 直に深崦（深山）より入り
 石梁宛在半空横 石梁（石橋）は 宛も半空に在りて横たわる

という（厲鶚撰『宋詩紀事』巻 16）。陸游は何度も訪れ、「毛平仲を訪ねて疾を問い、其の子适と母に柯山（爛柯山の略称）に遊んで、王質の爛柯の遺跡を観る」（淳熙 6 年 [1179] の作）などの詩を作っている。宋の柴随亨、明の胡応麟・徐渭らも訪れて詩を作る。『爛柯山志』編纂領導小組『爛柯山志』（浙江人民出版社、1998 年）によれば、爛柯山は唐宋以後、明清期に至るまで長く詩跡として歌い継がれている。現在、爛柯山は烏溪江風景名勝区となる。

【江山市】

○江郎山

江郎山【写真】は江山市の南25キロの地にあり、江氏兄弟3人が山頂に登り、石に化したための命名という（『大明一統志』巻43）。略称は江山。古くは金純山・須郎山とも呼ばれた。海拔824メートル。霊峰・亞峰・郎峰の三石峰（江郎石・靈石・郎峰）が鼎立してそばだつ。唐代から詩に詠まれはじめた。初唐・祝其岱「江郎山に登りて詠む」（登江郎山詠）詩には、

三峰屹立挿雲天 三峰屹立して 雲天を挿し

筆筆書空年復年 筆筆 空に書して（巨大な筆のように天空にそびえ立つさま） 年復た年と歌われる（傅春齡主編『衢州歴代詩選』〔復旦大学出版社、1990年〕に引く清・同治『江山県志』所収に拠る）。

その後も、三石峰が並んで天空に聳えるさまが、

拔地青蒼五千仞 地を抜く青蒼 五千仞

勞渠蟠屈小詩中 渠（靈石三峰）を勞して 小詩の中に蟠屈せしむ

（南宋・陸游「靈石三峰に過る」〔過靈石三峰〕2首其1、『劍南詩稿』巻10）

江郎山峰開画屏 江郎の山峰 画屏を開く

上有朗朗処士星 上に朗朗たる処士の星有り

（明・鄭善夫「歳暮 江郎山に入りて周山人を訪う」〔歳暮入江郎山、訪周山人〕『少谷集』巻7）

空中鼎立石為朋 空中に鼎立して 石 朋と為る

万古崔嵬不可登 万古崔嵬（高峻なさま）として 登るべからず

（明・余翔「江郎山を望む 口占」〔望江郎山口占〕『薜荔園詩集』巻3）

などと詠まれている。宋の王禹偁・欧陽脩・范仲淹・辛棄疾ら、元の王逢、明の劉基らが歌い継いだ詩跡である。現在、江郎山風景名勝区を形成する。



石梁下の石室



江郎山

《福建省》

【武夷山市】

○武夷山

武夷山市【旧、崇安県】の西南15キロ、福建第1の名山である。明の藍仁「武夷の魏士達に贈る」（贈武夷魏士達）詩に、

武夷山水天下無　武夷の山水　天下に無し
層巒疊嶂皆画図　層巒　疊嶂　皆な画図

と歌われている（『明詩綜』巻12）。海拔は約1500メートル。三十六峰と九曲溪の名勝で知られる。山の名は、神人（仙霊）の武夷君（武君と夷君の2人もいう）が住んだという伝承による。『方輿勝覽』巻11、建寧府、武夷山の条に引く『古記』には、「昔、神有りて山に降り、自ら武夷君と称す。後人、因りて名づけて武夷と曰う」とある。武夷山が詩に詠まれたのは、中唐・徐凝「武夷山の仙城」、晩唐・李商隱「武夷に題す」などに始まるようであるが、宋代になると、急速に詩跡化し、南宋の王象之撰『輿地紀勝』巻129、建寧府の条には「武夷山詩」の項目が設けられている。北宋・李綱「棲真館に題す三十六韻」（題棲真館三十六韻）詩の冒頭には、いわゆる《三三六六》（九曲溪と三十六峰）の名勝を詠みこんで、

武夷古洞天　武夷は　古き洞天（神仙の居所）
奇峰三十六　奇峰は　三十六
一溪貫群山　一溪　群山を貫き
清浅九曲縈　清浅　九曲縈る
溪辺列巖岫　溪辺　巖岫（峰々）列なり
倒影浸寒緑　倒影　寒緑を浸す

云々と歌う（『梁谿集』巻6）。宋の楊時「武夷に遊ぶ」、謝枋得「武夷山中」、明の徐渭「武夷山の一線天」詩などがあり、元・王士熙の「武夷の思学齋に寄す」（寄武夷思学齋）詩には、

武夷山色青於水　武夷の山色　水よりも青し
君築高齋第幾峰　君　高齋を築くは　第幾峰ぞ

と詠む（顧嗣立編『元詩選』二集巻11）。

○九曲溪・玉女峰

九曲溪は、武夷山脈の主峰・黄崗山の西南麓に源を発する、武夷山西南の溪流の名であり、九曲して崇陽溪（建溪）に注ぐ。その長さは7・5キロ。九曲溪は南宋・朱熹の「淳熙甲辰（11年—1184年）の中春、精舎に閑居して、戯れに武夷權歌十首を作り、諸同遊に呈し、相与に一笑」（淳熙甲辰中春、閑居精舎、戯作武夷權歌十首、呈諸同遊、相与一笑）という、七言絶句の連作、いわゆる「九曲權歌（舟歌）」で一躍有名となる。（当時、55歳）一曲ごとに変化する風光の美を、清新・明快に歌う第二首以下の前に置かれた、九曲溪の総述ともいべき第一首には、こう歌

われている（『晦庵集』巻9）。

武夷山上有仙靈 武夷の山上 仙靈有り
山下寒流曲曲清 山下の寒流 曲曲清し
欲識箇中奇絶処 箇中の奇絶の処を識らんと欲すれば
權歌閑聽兩三声 權歌 閑かに聴け 兩三声を

現在は上流の星村鎮から竹の筏（幅約2メートル、長さ約9メートル）に乗って九曲、八曲、七曲と下っていくが、古い時代は川を遡るため、下流から一曲、二曲と呼ばれていた。

二曲の西側にある玉女峰（高さ131メートル）の優美な姿は特に名高い。南宋初の辛棄疾「武夷の玉女峰」詩には、

玉女峰前一權歌 玉女の峰前にて 一たび權歌すれば
煙鬢霧髻動清波 煙鬢 霧髻 清波に動く

という（『宋詩紀事』巻52）。また武夷山に住んだ南宋末の道士・白玉蟾の「九曲雜詠」4首其3の「二曲の玉女峰」には、

插花臨水一奇峰 花を挿し水に臨む 一奇峰
玉骨瓊肌処女容 玉骨 瓊肌 処女の容

とある（『石倉歴代詩選』巻224）。いずれも玉女峰を美しい神女に見立てた描写である。ちなみに白玉蟾の詩は、朱熹の前掲の、いわゆる「九曲權歌」其3の、

二曲亭亭玉女峰 二曲は亭亭たり（高くそそり立つさま） 玉女峰
插花臨水為誰容 花を挿し水に臨みて 誰が為にか容づくる

（『晦庵集』巻9）を受けていよう。南宋・張至龍「武夷山」詩には、舟遊びの楽しさを、

九折蒼江轉葦航 九折の蒼江 葦航（小舟）を転じ
花間流水自宮商 花間の流水 自から宮商（妙なる調べ）

と歌い（『江湖詩集』巻18）、明・陳經邦「武夷に夜泛ぶ」（武夷夜泛）詩には、月明下の溪流のきらめきを、

半輪明月挂峰頭 半輪の明月 峰頭に挂り、
万点玻璃散碧流 万点の玻璃（七宝の一、水晶の類） 碧流に散ず（散乱する）

と詠んでいる（『福建風物志』福建人民出版社、1985年所収）。ちなみに九曲溪の兩岸の岩には朱塗りの題刻（磨崖石刻）が多く、優美な風情を添えている。六曲の空谷伝声処に刻まれている〈逝者如斯〉の文字は、朱熹の親筆と伝える。

○武夷精舎

九曲溪の五曲、隠屏峰の南麓にあり、朱熹が南宋の淳熙10年（1183）、54歳のときに築造した講学の処である。（仁智堂、隠求齋、止宿寮、観善齋、寒棲館、晩対亭など）朱熹はここで数年間講学した。南宋末（1261年）、拡張されて紫陽書院となる。明の正統13年（1448）、朱熹の八世孫

にあたる朱洵・朱澍が改建して朱文公祠と改称した。近年まで清初に再建された武夷精舎の残址と石碑が残るのみであったが、2001年再建された。

朱熹の五絶「精舎」詩（武夷精舎雜詠の一）にいう、

琴書四十年 琴書 四十年
幾作山中客 幾^{ほとん}ど山中の客と作る
一日茅棟成 一日 茅棟^{ぼうとう}（茅葺きの住まい）成り
居然我泉石 我が泉石に居然^{きよぜん}（安らか）たり

（『晦庵集』巻9）と。また彼の「行きて武夷精舎を視て作る」詩は、造営時の作である。清・查慎行の五律「武夷精舎」詩には、こう歌われている（『敬業堂詩集』巻44）。

早年蒙養地 早年 蒙養（潜心修養）の地
晩節宦遊途 晩節 宦遊の途
風雨一精舎 風雨 一精舎
溪山双画図 溪山 双画図
居常隣道院 居常（日常）道院を隣りにし
交不廢緇徒 交わりは 緇徒^{しと}（僧侶）を廢せず
識者觀其達 識者は 其の達なるを觀る
何曾累大儒 何ぞ曾て大儒^{わづら}を累わさん

○武夷宮

武夷山中で最も古い道教寺院（宮觀）の名。歴代の皇帝が武夷君（武夷山の神人）を祀ったところである。唐代の創建とされ、武夷觀という。九曲溪の入口、大王峰（三十六峰の一つ）の南麓にあった。（南唐のとき [944年]、洲渚^{なかつ}から移ったとされる）のち会仙觀・冲佑觀・万年宮などとも称された。明の葉俊「武夷」詩に、

武夷山下万年宮 武夷山下 万年宮
九曲溪頭一棹通 九曲溪頭 一棹（一舟）通ず

と歌われている（『明詩綜』巻16）。清代の名は冲佑万年宮。南宋の辛棄疾・陸游・朱熹らは、提举（管理の意）建寧府武夷山冲佑觀となり、祠祿（寺社の管理を名目とした俸祿）をもらっている。ちなみに朱熹は、淳熙3年（1176）、47歳のとき、主管武夷山冲佑觀という祠官 [2年任期、更新できる] を拜命した。（陸游は紹熙元年 [1190] の拜命）道觀は興廢をくり返し、近年重修された万年宮は、朱熹紀念館となる。

【福州市付近】

○西湖

福州の西湖【写真】は、福州市区西北部の鼓楼区にある湖水の名。西晋の太康3年（282）、郡守

の蔽高が農地灌漑のために造る。五代・閩^{びん}のとき、閩王^{おうしんち}王審知の次子・王延鈞が王位を継ぐと、湖
辺に亭・台・楼を造って御花園となし、次の宋代、遊覧の地となる。宋・陳長卿「西湖」詩には、

楊柳兩堤連綠蔭　楊柳の兩堤　綠蔭連なり
芰荷十里馥香風　芰荷^{きか}（ヒシ・ハス）十里　香風^{かお}馥る

とある（『方輿勝覽』巻10、福州、西湖の条）。

また南宋初・辛棄疾^{ツウ}の詞「賀新郎」には、

煙雨偏宜晴更好　煙雨偏^{ひと}えに宜しく　晴れて更に好し
約略西施未嫁　西施の　未だ嫁がざるに約略^{にた}り

と歌われ（『歴代詩余』巻94）、「小西湖」とも呼ばれる。上句は、北宋の蘇軾が杭州の西湖を詠ん
だ名詩「湖上に飲す、初めは晴れ、後に雨ふる」（二首其2）に見える句、「水光^{れんえん}激灑として　晴れ
て方^{まさ}に好く、山色^{くうもう}空濛として　雨ふるも亦た奇なり」を踏まえていよう。

湖の中にある開化嶼には、宛在堂・開化寺（唐代の建立）などが置かれた（湖辺から道が通じ
る）。宛在堂は明・正徳年間（1506～1521）に創建された傅汝舟^{ふじよしゆう}の別荘である。彼の「宛在堂^{えんざいどう}を築
かんと擬^{ほつ}し、石門の隠者を招き奉る」（擬築宛在堂、奉招石門隱者）詩には、

城外西湖煙霧光　城外の西湖　煙霧の光
孤山宛在水中央　孤山は　宛^{あたか}も水の中央に在り
門開獨樹懸青磴　門開いて　獨樹^{せいつう}　青磴（黒ずんだ石段）に懸かり
逕繞千花上碧堂　逕繞^{こみち}りて　千花　碧堂に上る

云々と詠まれている（『石倉歴代詩選』巻497）。宛在堂の名は、「孤山は　宛も水の中央に在り」
の地勢に基づく。宛在堂自体も興廢をくり返し、清の林則徐は道光7年（1827）喪に服するために
帰郷したとき、西湖を浚渫し、ここを執務の場所とした。現在の宛在堂は1997年の再建。西湖周
辺は民国3年（1914）、西湖公園となった。

○鼓　山

福州市の東郊12キロ、閩江の北岸にある山の名。海拔は969メートル、「石の状^{かたち}　鼓の如き有
り。故に名づく」（『方輿勝覽』巻10、福州、鼓山の条）という。別称は石鼓。南宋・趙汝愚の
「天風海濤亭^{かいたう}（鼓山の山上にあった亭の名。朱熹の「天風海濤」の四字が書かれていた）に題す」
（題天風海濤亭）詩には、

幾年奔走厭塵埃　幾年奔走して　塵埃^{じんあい}に厭^あく
此日登臨亦快哉　此の日　登臨　亦た快^{かな}き哉
江月不随流水去　江月は流水に随って去らず
天風直送海濤来　天風は直ちに海濤を送^{きた}り来る

云々とある（清・沈季友撰『橋李詩繫』巻2）。

また元・黄鎮成の「鼓山の靈源洞」詩の一節に、

青山尽処海門闊　　青山尽くる処　海門^{ひろ}闊く
 紅日上来天宇低　　紅日上り^{きた}来りて　天宇（天空）低し
 喝水無人空宴坐　　喝水（岩）に　人無くして　空しく宴坐（閑坐）し
 摩崖有客謾留題　　摩崖^{まがい}に客有りて　謾^{みだ}りに留題す

と詠まれる（『秋声集』巻3）ように、鼓山には宋代以来の題吟の石刻が200余処あった。湧泉寺の東、「靈源深処」の門に入って石段を下ると、靈源洞【写真】である。「喝水岩」の石刻があるため、付近は喝水岩とも総称される。ここには宋代以来の摩崖石刻が一面に刻されており、なかでも宋の蔡襄（「忘帰石」の大字）・李綱・朱熹らの摩崖題刻が有名である。その一つ、「邵去華・蘇才翁・郭世濟・蔡君謨、慶曆丙戌（6年 [1046]）孟秋八日、靈源洞に遊ぶ」という紀遊題刻もある。明・徐燿「重ねて喝水岩に遊ぶ」（重遊喝水岩）詩には、

古洞盤旋紫翠間　　古洞は盤旋^{ばんせん}す　紫翠の間
 洞門常借白雲関　　洞門は　常^とに白雲を借りて関ざす

と詠まれている（『幔亭集』巻7）。



福州の西湖



靈源洞

○湧泉寺

湧泉寺【写真】は五代の閩王審知^{びんおう}が、梁の開平二年（908）、鼓山の山腹に創建した古刹の名。寺の前に地面から湧き出る羅漢泉（現存）があったための命名という。鼓山寺とも呼ばれた。境内の二本の鉄樹は、開山祖師神晏と閩王王審知が植えたものと伝える。明の陳煇「鼓山の湧泉寺」詩には、静謐な美しい境内を、

風泉行処満　　風泉　行く処に満ち
 花竹坐来幽　　花竹　坐来^{ゆう}　幽なり（奥ゆかしい）

と詠んでいる（『（乾隆）福建通志』巻77）。また明・徐燿「湧泉の廢寺」詩には、火災にあつて荒廢した寺のありさまが、こう歌われる。

古寺荒涼久　　古寺　荒涼久しく

凄然感廢興 凄然として 廢興に感ず
残灰六十載 残灰 六十載
破衲兩三僧 破衲（破れた僧衣） 兩三僧

云々と（『幔亭集』巻5）。ちなみに鼓山の山麓から山腹の湧泉寺へは、一筋の古い石径が通じている。その石段は2500余段、長さは3・5キロ。両側は緑松、幽澗、流水である。

【泉州市付近】

○東湖

泉州の東湖【写真】は、泉州市の東郊・豊沢区にあり、七星湖ともいう。かつて泉州最大の湖水であり、現在、東湖公園となる。唐の貞元9年（793）、泉州刺史の席相は、ここで宴を開いて、歐陽詹ら8人が科挙を受験するために長安に赴くのを見送った。詹は進士科第2位となり、韓愈らとともに及第した（龍虎榜）。欧陽詹の「泉州の二公亭記」には、風景の美しさを、「之を含むに澄湖万頃を以てし、之に揖する（会釈する）に危峰千嶺を以てす」（『唐文粹』巻74）とたたえる。

この文章題に見える二公亭は、東湖中の小島にあった。唐の貞元年間、泉州刺史の席相と、貞元8年（792）直言のために泉州別駕に左遷されていた（もと宰相の）姜公輔が、「奇しき草を得て、二公亭を建て、郡の人之に名づく」（『方輿勝覽』巻12、泉州）という。南宋・黄公度（こうど）の詩「陳晋江 壬戌四月上澣（上旬の休息日）を以て、同僚を二公亭に宴す」（陳晋江以壬戌四月上澣、宴同僚于二公亭）には、

百年遺址俯郊垆 百年の遺址 郊垆（郊外）に俯し
十里蒼波帶古亭 十里の蒼波 古亭を帯ぶ（囲む）

という（『知稼翁集』巻上）。

南宋時代、東湖は二度にわたって湖水の整備が進み、蓮の花の名所となった。南宋の王十朋「東湖小飲」詩に、

湖光照我眼 湖光 我が眼を照らし
荷香清我襟 荷香（蓮の花の香り） 我が襟（胸懷）を清らかにす

と歌い（『梅溪集』巻15）、「東湖」詩も伝わる。南宋初・曹勛（そうくん）の詩「李漢老参政の重陽の前に泉州の東湖に遊ぶに次韻す」（次韻李漢老参政重陽前、遊泉州東湖）にも、神秘的な美しさを、

郊亭十里繞風漪 郊亭 十里 風漪（風に生じたさざなみ）を繞らし
一鑑光涵万象微 一鑑（一枚の鏡のごとき湖面）の光は涵す 万象の微なるを

と歌う（『松隱集』巻13）。明の莊一俊「東湖に遇れば、蓮花猶お開く」（過東湖、蓮花猶開）詩には、季節の歩みの異同を、

客驚落葉城中下 客は驚く 落葉 城中に下るに
人在荷花水上行 人は荷の花に在りて 水上に行く

と歌っている（泉州市歴史研究会編『泉州名勝詩詞選』福建人民出版社、1983年所収に拠る）。



湧泉寺



泉州の東湖

○泉州開元寺・双塔

泉州市鯉城区の西街にある古刹の名。「唐・武后の垂拱二年（686）、居民黄守恭の宅園中の桑の樹に、忽ち白蓮の花生ず。因りて宅を捨てて寺と為す。… 天下の開元寺の第一為り」（『方輿勝覽』卷12、泉州、開元寺）という。初め蓮花寺（興教寺、龍興寺）といい、開元26年（738）、開元寺となる。閩南（福建省南部）を代表する仏教寺院である。双塔は境内の両側にあり、東西塔・紫雲双塔などともいう。ともに五層六角形の（花崗）石造で、精緻な浮き彫りがある。このうち東塔（鎮国塔）は、はじめ木造（865年）、南宋の嘉熙2年（1238）、石造となる。高さ48・24メートル。東塔に刻まれている明・詹仰庇の詩「双塔を詠ず」（詠双塔）には、

石塔双飛縹渺間 石塔 縹渺（高遠）の間に及び飛び

凌虚頂上結金团 虚（天空）を凌ぐ頂上に 金团（塔頂の銅葫蘆）を結ぶ

と詠まれる。西塔（仁寿塔）も、はじめ木造（916年）、南宋の紹定元年（1228）、石造となる。高さは44・06メートル。西塔第4層の東北壁には猴行者の浮き彫りがあり、孫悟空の原姿かともされる。西塔には唐三蔵、梁武帝、昭明太子等の浮き彫りもあるという。泉州市歴史研究会編『泉州名勝詩詞選』（前出）には、前掲の詩のほか、明の黄鳳翔、周廷鑑、黄克梅、黄景昉、清の龔顯曾らの詩を収めるが、大半が泉州付近の人であり、開元寺は結局のところ詩跡としてはあまり成長していない。双塔は現在、上に登ることが禁止されている。

○洛陽橋

洛陽橋【写真】は古くは万安橋ともいい、泉州市の東北（泉州市鯉城区東約10キロ）に位置する。惠安县から泉州市にいたる（境界線上にある）洛陽江の、海に入るところに架かる、大きな石造一花崗岩の橋であり、交通・輸送の要衝となる。伝説によれば、唐の宣宗はかつて微行して訪れ、山川の美しさを見て、「吾が洛陽に類たり」といったという（『方輿勝覽』卷12、泉州、洛陽江の条に引く『図経』）。

北宋の泉州太守蔡襄（字君謨—著名な書道家、1012-1067）が皇祐元年（1053）、橋の建造を提唱した。蔡襄の「万安橋記」によれば、泉州万安渡石橋は嘉祐4年（1059）に成る。もとの長さは1・2キロ、幅は約5メートル。蔡公祠（＝忠惠蔡公祠・蔡襄祠、橋の南にあり、宋代の初建、清代の再建）のなかには、蔡襄手書の「万安橋記」の宋碑が伝存する。現在の橋の長さは834メートル、幅7メートルである。

北宋・華鎮の七絶「洛陽橋」は、壮大な橋の賛歌である（『雲溪居士集』巻13）。

壯年已熟洛陽名 壯年 已に熟す 洛陽の名
今日親來橋上行 今日 親ら來りて 橋上を行く
暈石根盤連厚地 石を暈ね 根は盤りて 厚地に連なり
凌雲氣勢压滄瀛 雲を凌ぐ氣勢 滄瀛（大海原）を压す

転句は、石を重ねた橋脚の基礎が深く大地に根を張るさまを描写する。

また宋・陳称の詩「泉州の万安橋に題す」（題泉州万安橋）には、

跨海為橋布石牢 海を跨いで橋を為り 石を布くこと牢し
那知直下压靈鰲 那ぞ知らん 直下 靈鰲を压するを

という（『宋詩紀事』巻27）。後句の靈鰲とは伝説中の、神山を頭上に戴く巨大なウミガメ（『列子』湯問篇）。また宋の劉子翬「洛陽橋」詩には、

跨海飛梁暈石成 海を跨ぐ飛梁（高い橋） 石を暈ねて成り
曉風十里度瑤瓊 曉風十里 瑤瓊（美玉 [の橋]）を度る

とあり（『屏山集』巻16）、南宋の王十朋「洛陽橋」詩（『梅溪集』後集巻18）にも、

北望中原万里遥 北のかた中原を望めば 万里遥かなり
南來喜見洛陽橋 南來して喜び見る 洛陽橋
人行跨海金鰲背 人は行く 海を跨ぐ金鰲の背を
亭压横空玉蝀腰 亭は压す 空に横たわる玉蝀（白い虹。アーチ形の石橋の比喩）の腰を

などと歌う。

南宋・劉克莊の七絶「洛陽橋三首」其3は、橋を架けた偉業をたたえる（『後村集』巻12）。

面跨虚空趾没潮 面えば虚空に跨り 趾（橋脚）は潮に没す
長鯨吹浪莫飄搖 長鯨（大きな鯨） 浪を吹くも 飄搖する（揺らぐ） 莫し
向來徒病川難涉 向來（従来） 徒らに病む 川の涉り難きを
今日方知海可橋 今日 方めて知る 海は橋すべき（海に橋を架けられる）を

その後も明の謝肅「万安橋」詩などの作が伝わり、王世貞の詩には閩中の名勝として詠む。

○九日山

泉州市の西、南安市豊州鎮旭山村〔金鷄村〕にある山の名。「旧俗、常に重陽の日を以て此に登高す。故に名づく」（『方輿勝覽』巻12、泉州、九日山の条）という。晋江の北岸に位置し、東

峰・西峰・北峰の三峰からなる。東峰は高さ約 112 メートル、姜公輔（唐の宰相。泉州別駕に左遷された後、官を辞す）の隱棲・終焉の地であるため、姜相峰とも呼ばれる。

他方、西峰は高さ約 90 メートル、中唐の詩人秦系は建中年間（780～783）ごろ泉州に来て、九日山を愛して隱棲した（『新唐書』巻 196、隱逸伝、秦系の条）ので、高士峰とも呼ばれる。（一時期、当地を離れた後、貞元年間の中後期、再び住む）秦系の「春日閑居三首」其 1 に、

一似桃源隱 一えに桃源の隱に似たり
将令過客迷 将に過客をして迷わしむ

とある。

当地の人は秦系をしのいで「秦君亭」【写真】を建てた。南宋・王十朋の七絶「秦君亭」詩には、

山中高隱欲逃名 山中の高隱 名を逃れんと欲す
不謂名隨隱處成 謂わざりき 名は隱處に随つて成るを
石鑿一泓詩數首 石に一泓を鑿ちて（石に穴をあけて硯としたこと） 詩數首
也曾攻破五言城 也た曾て五言の城を攻め破る

唐の権徳輿は、劉長卿は自分の詩こそ五言の長城と思っているが、秦系は偏師（一部隊）でそれを攻めている、と評した話があり（『新唐書』巻 196、隱逸伝）、結句はこれを踏まえて、秦系の詩作を高く評価する（『梅溪集』後集巻 18）。また南宋の積円悟・呉棫には、「秦君亭に題す」（題秦君亭）詩があり、後者の呉棫の詩には、

秋日春風麗句亭 秋日 春風 麗句の亭
先生天上少微星 先生は 天上の少微の星（処士の星）

と歌う（『宋詩紀事』巻 26）。現在のものは 1990 年の再建である。

南宋の朱熹には「九日山の石仏院の乱峰軒に題す二首」、「九日山の廓然亭に寄題す」（寄題九日山廓然亭）などがあり、後者の詩には、

昨遊九日山 昨て九日山に遊び
散髮巖上石 髮を巖上（峰の上）の石に散ず
仰看天宇近 仰いで天宇（天空）の近きを見
俯歎塵境窄 俯いて塵境の窄きを歎く

云々と歌われている（『晦庵集』巻 8）。廓然亭も現在、東峰に再建されている。

九日山の延福寺（西晋の太康 9 年 [288] の創建。唐の大曆 3 年 [768]、現在地に移る。1991 年の再建）は、宋代、商船が海に出る際に順風を祈って船を送る場所であり、郡守の蔡襄・王十朋・真徳秀らが祈風の大典を掌ったことで知られる。出発を待つ海船が九日山下の金鷄古港に雲集し、風帆をあげ、晋江を下って刺桐（泉州）港に出て、大海に乗り出したという。このため九日山は海のシルクロードの起点とも見なされる。北宋以降、清代に至る摩崖石刻が東峰と西峰にあわせて 77 あるとされ、中には祈風の碑刻もある。唐宋以来、泉州は著名な海外貿易港であった。



洛陽橋



秦君亭

○本稿は、科学研究補助金（基盤研究（B））「中国文学研究における新たな可能性—詩跡の淵源・江南研究の構築—」（課題番号 22320067、研究代表者植木久行）の研究成果の一部である。平成22年9月6日から1週間、浙江省の杭州・紹興・諸暨・金華・衢州市と福建省の武夷山・福州・泉州市の各地に点在する詩跡を実地調査する機会に恵まれ、その成果を踏まえて執筆した。また本稿は、すでに掲載済みのホームページ「中国詩跡」（<http://www.shiseki.com/>）の文章をもとに、資料を補充し、再度推敲したものである。